AROUND THE WORLD 30

北ゲルマン語を巡って [4]

森　信嘉　Mori Nobuyoshi（東海大学）

古ノルド語Ǫの秘密

アイスランドの Gullfoss（金の滝）

古ノルド語の入門書と言えば E. V. Gordon 編著による *An Introduction to Old Norse* が特に有名である。北ゲルマン語資料の背景と文法解説，語彙集に読解練習用のテキストが収められている。テキスト全体の 9 割以上を西ノルド語が占め，東ノルド語は 1 割弱である。西ノルド語の代表格と言えばアイスランド語であろう。そのためか古ノルド語は古アイスランド語と称せられることもある。現代アイスランド語は「言語の化石」と呼ばれることがあるくらい，古アイスランド語の姿を継承している。宗教改革があった年は 1550 年であるが，アイスランド語史では 1500 年代半ばを 1 つの区切りとするのが一般的である。この時期に古語と現代語を区別する音韻変化，語尾変化が生じている。1200 年代から 1900 年代にかけての文献に現れる語の頻度調査によると，もっとも使用頻度の高い語は今も昔も変わっていない（アラン・カーカー編『北欧の言語』）。

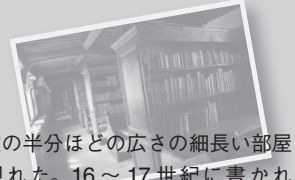
古ノルド語で使用されていたが現代の北ゲルマン語では見られなくなった文字にǪがある。o に短い尻尾が生えたような文字であるが，筆者はこの文字がことのほか気に入っている。しかし音価がよくわからない。「フィヨルド」のことは現代アイスランド語で fjörður と表記されるが，古ノルド語では fjǫrðr となるので，Ǫの音価はいわゆる「オ」と「エ」の中間のような音 ö であろうと想像していた。ところが，ノルウェーで使用される高校の教科書にǪは å，つまり「オ」/ɔ/ と発音すると書かれていた。一方, 古ノルド語の入門書の 1 つでǪは「円唇後舌広母音」とされていた。つまり，/ɑ/ に円唇が加わったものということである。説明が微妙に異なっている。思わず「Ǫって何 ?!」と叫んでしまう。

困った時はノルウェー語に救いを求めるのが筆者の常である。ノルウェーにおける書き言葉の 1 つに古ノルド語とノルウェー諸方言を基盤として作られた「ニューノシュク (nynorsk)」がある。さらに，ノルウェー語は方言が豊かである。そこで，「Ǫって何 ?!」を北ノルウェー語方言風のニューノシュクで言ってみる：“Ka er Ǫ for noko?!”。この文に現れる単語にあたる英語の単語を順番に挙げると “what is Ǫ for something” となるが，発音は「カー エルǪフォル ノーコ」である。なっ，なんと！　この文の中に答えが隠されているではないか！　「カーエルノーコ」。そう，Ǫは実は「蛙の子」つまり，「オタマジャクシ」のことなのではないか。「おーたまじゃくしは♫♬♫～蛙の子～♫♬…」。どうりで掴みどころがないはずだ。

表紙写真について

ウェルズの大聖堂

編集部



イングランドではあちこちの大聖堂を訪れたが，サマセット州（Somerset）ウェルズ（Wells）の大聖堂は特に印象に残っている。

12 世紀後半から建築が始まったとされるウェルズ大聖堂（Wells Cathedral）は，大聖堂としては中規模の大きさである。しかし，中世の面影を残すその堂々とした荘厳な外見は，訪れた者の目を釘付けにし，魅了する。一方，大聖堂前に広がる緑の広場では，街の人々がベンチや芝生に座り，本を読んだり家族や友人と談笑したりしている。人口 1 万人に過ぎないイングランド最小のシティ（city），ウェルズの街の日常は大聖堂とともにあることが理解できる。

大聖堂の中に入ると，主祭壇へと続くまっすぐな中央通路がステンドグラスから差し込む柔らかい光に照らされている。高い天井へと広がる大きな空間は，そこにいるだけで心が洗われるような気がして心地よい。建物の中央まで進み，立派なパイプオルガンの下をくぐり抜けると，大聖堂では珍しい “Library” の表示が。石でできた螺旋（らせん）の階段を上へと進む。すると，その先に学校の教室の半分ほどの広さの細長い部屋が現れた。16 ～ 17 世紀に書かれた約 2800 の蔵書が保管されている Library。この場所で，中世の聖職者たちも本を読みふけったのであろうか。そんなことを考えていると，心は一気にタイムトリップしてしまう。

イングランドにはどんな街にも歴史を感じられる建物が数多く残されている。日常の喧噪（けんそう）を忘れさせてくれるそんな場所との出会いを楽しみに, 次の旅の計画を立てようと思う。